特別支援学級　自立活動　学習指導案

姫路市立水上小学校　教諭　菊池　甲餘子

1, 単元名　かけがえのないいのちとともに生きよう

2, 単元目標

・赤ちゃんがどのように大きくなって生まれてくるのかを知ることができる。（知識及び技能）

・第二次性徴による自分自身の体の変化について知ることができる。（知識及び技能）

・ゲストティーチャーの話や詩を読んで、自分の命とどのように向き合っていくことが大切なのかを考えることができる。（思考力・判断力・表現力等）

・自分の体に興味を持ち、進んで話を聞いたり調べたりすることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

3, 単元の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
1　赤ちゃんがお腹の中でどのように過ごして生まれてくるのかを知ることができる。 2　第二次性徴による体の変化について知ることができる。	1　ゲストティーチャーの話を聞いて、気になることや考えたことを伝えることができる。 2　家族の思いを知って感じたことを述べることができる。 3　自分の命との向き合い方について考え、思いを伝えることができる。	1　ゲストティーチャーの話などを進んで話を聞くことができる。 2　自分の体について興味を持とうとすることができる。

4, 単元について

(1) 教材観

本教材は、特別支援学級での自立活動である。担任が妊娠中であることから、担任のお腹が大きくなる様子を近くで見ていく中で、命の素晴らしさや自分の命のありがたみについて改めて見つめていくことができる教材である。

実際に助産師の方の話を聞いたり、お腹の中の赤ちゃんの心臓の音を聞いたりすることで、生きていることの実感を持ち、自分の命や体について興味を持つことができると考える。自分の命や体について考える上で、保護者の方の思いを知ることも必要である。お腹の中、生まれてからのお母さんや家族の思いについて知る機会を作り、一人ひとりが望まれて生まれてきた喜びを感じられるような取り組みにしていく。

また、小学校５年生で亡くなった宮城由貴奈さんの詩「命」を読み、命や体との向き合い方を知っていくようにする。さらに養護教諭による第二次性徴やプライベートゾーンについて話を聞くことで、自分の命や体の守り方や相手との関わり方について考えることができるようにしたい。

最後には、自分の等身大の型取りをして自分の色を彩っていくことで今の自分を客観的に見ることができると考える。この客観的な視点を持つことで将来への希望や命や体との向き合い方を考えるきっかけを作ることができるだろう。

(2) 児童観

ひまわり学級は、知的障害学級・自閉症/情緒障害学級・肢体不自由学級の３学級の構成である。在籍児童は10名で一人ひとり特性や個性が異なるため、それぞれにあった学習や支援を行っている。

担任が妊娠中であることから、体調の変化やお腹が膨らんできている様子を見て、興味を持つことが多

い。特に自閉症/情緒障害学級の３年の男児は、毎日「赤ちゃん生まれた？」と尋ねてくる。また、担任のお腹をなでながら、「先生の赤ちゃんの頭めっちゃ大きいな。」と話をすることが多く、赤ちゃんの様子について知識が乏しいことが伺える。さらに、３年男児は、担任や支援員の体に触れようとしたり、下着をずらして陰部を友達や教職員に見せたりして、喜んでいることが多い。このことから、プライベートゾーンの意義を理解していない。

自閉症/情緒障害学級の４年の男児、肢体不自由学級の５年女児は第二次性徴に向かっており、体の発達が著しい。４年男児は、自分自身への関心がなく、体の変化について考える機会が少ない。また５年女児は知的にも遅れがあり、月経についての理解や初潮があった時の対応などが乏しい状況である。さらに知的障害学級の６年女児は、女性として体が発達していることで妊娠する体になってきていると理解できていない。これに加えて、卒業後の将来について不安感を抱いていることなどから、自分自身や命との向き合い方を考えることが難しいことが伺える。

そこで、本単元を通して、自分の体や命と向き合う時間を作っていきたい。その時間の中で、命が繋がって今の自分がいることに気付き、自分の命や体を守ることの必要性に気付いてほしい。また、友達と一緒に学習をする中で、自分と友達はそれぞれ生まれや育ちの背景が違うこと、命は一人ひとりが持つ大切なものであり、互いが互いの命を尊重することの意義を知っていってほしい。

(3) 指導観

【みつめる】では、担任のお腹に興味を持ち、「赤ちゃん」の存在を感じる段階である。妊娠６か月ごろから、胎動を外からも感じることが増えてきた。この胎動を児童にも感じてもらい、もう一つの命が存在していることを体で感じていくようにする。さらに、それらを踏まえ、赤ちゃんがお腹の中で過ごしているのかが見えない状況の中で、児童がどのように考えているのかを可視化していく。お腹の中の様子を予想した絵を描くことで、助産師の話を聞くときの見通しが持てるようにする。

【しらべる】では、赤ちゃんの育ち方や自分自身の育ちについて知る段階である。助産師の話を聞き、お腹の赤ちゃんの様子について知識を増やしていく。その際、【みつめる】で描いた予想の絵を用い、共通点や相違点を見つけられるようにする。また、出産予定日の日数が把握できない児童のために、カレンダーを活用してシールを貼るなどして、出産予定日と現在の時間軸を具体的に示していく。さらに、聴診器を用いて、赤ちゃんの心音と自分自身の心音を聞くことで、「命」に興味を持つようにする。

助産師の話を聞いた後、自分自身の生まれた時の様子について調べていく。事前に保護者にワークシートを配布し、思いを書いてもらう。これらを丁寧に読む時間を作っていきながら、自分自身が生まれてきたことへの喜びに繋げていく。表情カードなどを用いながら感じたことを表現する時間を設ける。そして、友達の話を聞いていく中で、自分と友達には同じところと違うところがあることを気付くようにしていく。

【ふかめる】では、命を大切にする意義を考える段階である。宮城幸貴奈さんの「命」の詩を読んで感じたこと考えたことを一人ひとり言葉にしていく。この時、感想を紙に表現し、在籍児童が友達の感想をすぐに見ることができるような環境を作っていく。さらに、作者がどのような思いでこの詩を書いたのかを想像することで他者理解に繋がるような取り組みにしていく。

「命」の詩を基に、命の繋がりについて養護教諭から話をしてもらう。この時に第二次性徴について話を聞き、自分自身や友達が大人の体に近づいていることに気付くようにする。また、今まで元気に育ってきたのは、お家の方が大切に育ててきてくれているからだということを理解できるようにする。学んだことを話し合う中で、命を大切にすることはどういうことなのかを発問し、病気やけがにならないことや自分の命や体を守る必要性に気付かせる。その際、プライベートゾーンについても触れていくことで、自分の体を守る方法についても具体的に示していく。４年男児の保護者が執筆している絵本を実際に読み聞かせをしてもらいながら、学んできたことを振り返ることができるようにする。

【ひろげる】では、まとめとして等身大アートを作る段階である。生まれた時の身長と今の身長を模造紙に型取り、成長の変化を客観的に見られるようにする。そして、自分の将来像を考えながら、色塗りをしたり、目標を文字に起こしたりことで、自分自身の命や体と向き合っていく時間を作る。また、友達と一緒に作成する中で自分と友達の違いや相手の命や体も大事にしていかなければならないと気付くことができるように指導をしていく。

4）ESD との関連

ESD の視点（見方・考え方）

【相互性】…命はずっと繋がっていること。
【有限性】…命には限りがあること。
【公平性】…命や人権の公平性

ESD で育てたい資質・能力

【未来を予想して計画を立てる力】
・自分の成長した姿を知ることが出来る。
・これからの自分の成長する姿を想像することが出来る。
【コミュニケーションを行う力】
・ゲストティーチャーの方の話を聞いて、疑問に思ったことや感じたことを伝える。
・保護者と児童の触れ合う機会や話す機会を増やす。
・友達の意見を聞く力を養う。

ESD で育てたい価値観

【世代間の公正】
・命は繋がって今の自分がいることに気付くことが出来る。
【人権・文化を尊重する】
・一人ひとり生きる権利を持っている。
・自分の体を守っていくことが大切である。
・与えられた自分の命を精一杯生きる必要性を感じる。
・自分の気持ちとの向き合い方を見直し、一人の人間としての生き方を見つけるきっかけを作る。
【幸福感に敏感になる】
・保護者と児童が話す中で互いの思いを知り、幸福感を共有する。

SDGs との関連性

３：健康と福祉

たった一度の命を大切に扱う必要性に気付く。

５：ジェンダー平等

どの人も生きる権利を持っていることを理解できる。

10：不平等解消

一人ひとりの人権を大切にし、相手の気持ちを知ることができる。

５．自立活動との関連

A児(知)・B児(自)・C児(自) ６年　　４年　　３年	E児(知)・F児(知)・G児(知)・H児(肢) １年	I児(肢) ５年	J児(知) １年
【１．　健康の保持】 （３）自分の体について知り、命について考える。 （５）成長のためにこれからの生活を見つめなおす。 【２.心理的な安定】 （１）家族から自分の育ちについて話を聞いて、喜びを感じる。 【３.人間関係の形成】 （１）ゲストティーチャーの話の聞き方を考える。 【４.環境の把握】 （３）聴診器で心臓の音を聞き、命について興味を持つ。 【6.コミュニケーション】 （５）友達との関わり方を見つめ直す。	【１.健康の保持】 （３）自分の体について知る。 【２.心理的な安定】 （１）家族から自分の育ちについて話を聞いて、喜びを感じる。 【４.環境の把握】 （３）聴診器で心臓の音を聞き、命について興味を持つ。	【１.健康の保持】 （３）自分の体の変化について聞く。 【２.心理的な安定】 （１）家族から自分の育ちについて話を聞いて、喜びを感じる。 【３.人間関係の形成】 （１）ゲストティーチャーの話の聞き方を考える。 【４.環境の把握】 （３）聴診器で心臓の音を聞き、命について興味を持つ。 【５.身体の動き】 （３）第二次性徴で起こる変化に落ち着いて行動できるように練習する。	【１.健康の保持】 （３）自分の体について知る。 【２.心理的な安定】 （１）友達と共に活動に取り組む。 【３．人間関係の形成】 （４）集団での活動に慣れる。 【４.環境の把握】 （３）聴診器で心臓の音を聞き、命について興味を持つ。

６，指導計画

	学習活動	指導上の留意点	評価
みつめる	○担任のお腹を撫でながら、胎動を感じる。 ・話かけたり、お腹を少し押してみたりして、胎動を感じる。	○落ち着いた環境の中で、話ができるようにする。	○ワークシートにイラストを描き、意欲的に取り組もうとする。【主２】
	○お腹の中の様子を想像して絵を描いてみる。	○想像で描き、助産師の話に意欲的になることができるようにする。	
しらべる	○助産師からお母さんのお腹の中の様子について話を聞く。 ・お母さんのお腹と赤ちゃんがどのようにつながっているのかを知る。	○分からない言葉や難しい言葉は補足説明をしていく。 ・聴診器で赤ちゃんの心臓の音を聞いた後に、自分の心臓の音を聞く。	○助産師の話を聞き、赤ちゃんについて興味を持つ。【知１・思１・主１】
	○自分たちが生まれた時の様子について、お家の人から話を聞く。 ・生まれた大きさ・重さ・時間・名前の由来を聞く。 ・お母さんや家族の思いを聞く。	○冬休みの宿題で記入していただいたプリントをもとに、話をしていく。	○エピソードについて話を聞く。【思２】
	○お家の人の話を聞いて感じたこと・考えたことを出し合う。 ・友達と自分が違うことに気付く。	○お家の人の思いを聞いて感想や自分の思いを話すことができるようにする。	
ふかめる	○宮城幸貴奈「命」を読んで考えたことを話す。 ・小学生が書いた詩であることを知る ・病気と闘った子だったことを知る。	○今生きていることが当たり前ではないことを感じられるように話をする。	○感想をワークシートに書く。【思３】
	○命の繋がりについて話を聞く。 ・大人の体になっていくことを知る。（第二次性徴） ・両親が子どもの命を守ってきたことに気付く。 ・大人の体に近づくことで良い面もあれば危険な目に合うこともあることを理解する。	○養護教諭から第二次性徴についての話をしてもらう。 ・イラストや図を用いながら理解できるようにする。 ○プライベートゾーンについて知る機会を作る。	○養護教諭の話を聞く。【知２】
ひろげる	○「命を大切にする」ことはどういうことかを話し合う。	○ウェブリングなどをしながらイメージを持てるようにする。	○ワークシートにイメージを書く。【思３】
	○等身大アートを描く。 ・成長している意味を考える。 ・今の自分に合う色で等身大に色を塗る。 ・自分の命との向き合い方を等身大に言葉にして書く。	○学習のまとめとして、自分の今の身長と生まれた時の身長を客観的に見つめられるようにする。 ・将来像を思い描くことができるように声掛けをする。	○等身大アートの作品を作る。【思３・主２】
	○赤ちゃんと会う。 ・心臓の音を聞いた時のことを思い出すようにする。	○実際に、産まれてきた赤ちゃんと触れ合い、感じたことを話す。	○感想を言う。【思３】

7, 本時案①（3 時間目/全９時間）実施日 1 月 15 日（水）3 時間目（10：45～）

（１） 本時の目標

・赤ちゃんがどのように大きくなるのか知ることができる。（知識及び技能）

・話を聞いて考えたことを相手に伝えることができる。（思考力・判断力・表現力等）

・進んで話を聞いたり、心臓の音を聞いたりして、命について興味を持つことができる。

（主体的に学習に取り組む態度）

（２） 学習計画

展開	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	○助産師の自己紹介 ・どのような仕事をしているのかを知る。	○助産師の仕事の話を聞いて、興味を持てるようにする。 ・動画を見て仕事のイメージを持つ。	
展開	○本時のめあての確認 ・担任のお腹の中に赤ちゃんがいること ・お腹にやって来て 8 か月経ったこと。	○事前に描いたお母さんのお腹の中の赤ちゃんの絵を用意して、予想とどう違うのかを気付くことができるようにする。 【発】いつまでお腹の中にいるのかな？どんな風におなかで過ごしているのかな？	○予想したことを話すことができる。
	お腹の中の赤ちゃんはどのように大きくなって生まれてくるのかを知ろう。		
	○助産師からお母さんのお腹の中の様子について話を聞く。 ・赤ちゃんの人形を抱っこする。 ・袋に入った赤ちゃんの人形をお腹の中に入れて歩いてみる。 ・お母さんのお腹と赤ちゃんがどのようにつながっているのか知り、へその緒の役割や胎盤の役割について知る。 ・赤ちゃんがいつ生まれてくるのかを知る。	○机の上に週数で異なる大きさの人形を用意し、予想しながら赤ちゃんの大きさや重さを知るようにする。 ○重さやお母さんの体の動きを体験できるようにする。 ○人形の中を見せてもらい、想像しやすくする。 ○時系列などが分かりやすいように可視化する。	○助産師の話を聞いて、赤ちゃんの様子を絵に描く
	○助産師に質問をする。 ・しゃっくりをする理由 ・頭が下になっている理由	○写真や動画・人形などを用いて疑問が分かるようにする。	
	○聴診器を用いて、お腹の赤ちゃんの心臓の音を聞く。 ○自分の心臓の音を聞く。	○担任のお腹を見るときに笑わないこと嫌がらないことを事前に伝える。 ○赤ちゃんの音と自分の心臓の音を比べて、同じところや違うところを感じられるようにする。	○自分から進んで心臓の音を聞こうとする。
終末	○感想を述べる。 ○助産師からの話	○感情のイラストを用いて今日の感想を述べることができるようにする。 ○命を大切にすることの意味について理解できるよう補足説明などを行う。	○話を聞いて考えたことを感想で述べる。

7, 本時案②（7 時間目/全 9 時間）実施日 1 月 31 日（金）3 時間目（10：45～）

（３） 本時の目標

・自分や友達の体の変化や命の繋がり方について知ることができる。（知識及び技能）

・自分や相手の体との向き合い方について話すことができる。（思考力・判断力・表現力等）

（４） 学習計画

展開	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	○前回の助産師さんの話を振り返る。 ○今回の授業の約束を確認する。	○赤ちゃんが大きくなっていくこと ・みんな愛されて生まれてきたこと ○性との向き合い方について話をする。 ・面白がらない。 ・恥ずかしがること。 ・一生懸命聞くこと。	
展開	○養護教諭の自己紹介 ○本時のめあての確認	○自分の体と向き合う学習であることを伝え、見通しを持たせる。 【発】なぜ、男の人にはおちんちんがあって、女の人にはおちんちんがないのだろう？	
	自分や友達の大切な体について知ろう。		
	○今までの体について考える。 ・男の子と女の子がどちらかを答える。	○子どもの体と大人の体の違いを知るように、顔を隠してクイズをする。 ・0～10 歳は自分の体を作る時期 ・お家の人が大切に守ってきたからこそ、今の自分がいる。	○体の違いを話すことができる。
	○第二次性徴について話を聞く。 ・10 歳からは、大人としての体になっていく。 ・ナプキンを触らせる。 ○変化がある部分を自分の体に画用紙を貼る。	○大人の体つきの変化に気付くようにする。 ・可視化することで具体的に自分の体の変化を感じられるようにする。 ・ナプキンを触り女性が身に着けているものについて考えられるようにする。	○体に貼りつけながら表現することができる。
	○プライベートゾーンについて知る。 ・自分の体に貼った変化のある部分は、人には見せてはいけないものである。	○体の変化に対して、相手にどのように接してもらいたいかを考えられるようにする。	
終末	○絵本を読む。 「性の絵本　みんながもっているたからものってなんーんだ？」	○命を大切にすることの意味について理解できるよう補足説明などを行う。 ・保護者に読み聞かせをしてもらう。	○絵本を一生懸命聞くことができる。
	○養護教諭からの話	○導入の約束事との繋がりを踏まえて話をする。	

8, カリキュラムマネジメント

特別支援学級

現在の学年終了時に目指す姿

自分の命や成長に喜びを感じ、生きることや命を大切にすることの大切さに気づくとともに、一人ひとりが相手を尊重する気持ちを持つことができる。

自立活動「かけがえのない命とともに生きよう」

➪体験を通して命を感じよう！

〇主に養いたい ESD の資質・能力

【未来を予想して計画を立てる力】

・自分の成長した姿を知ることが出来る。

・これからの自分の成長する姿を想像することが出来る。

〇主に育てたい ESD の価値観

【世代間の公正】

・命は繋がって今の自分がいることに気付くことが出来る。

【人権・文化を尊重する】

・一人ひとり生きる権利を持つことを知り、自分の体を守っていくことが大切であることを理解する。

・自分の気持ちとの向き合い方を見直し、一人の人間としての生き方を見つけるきっかけを作る。

【幸福感に敏感になる】

・保護者と児童が話す中で互いの思いを知り、この世に生まれてきたことに喜びを感じられる。

道徳「命」

宮城由貴奈の「命」の詩を読んで、命には限りがあることを知ることができる。また、自分の命とどのように向き合っていくべきか考えるきっかけにする。

生きたくても生きていくことができない人がいるんだ。

同じ小学生なのにかわいそう。

命を電池に例えている。

国語科「詩を読んで、感じたことを話そう」

詩の特徴を理解し、表現技法についても知ることができる。また、宮城由貴奈の「命」の詩が書かれた背景を知ることで、詩を読んで感じたことを話すことができる。

算数科「ものの長さや重さをはかろう」

メジャーやはかりの使い方や単位を理解するとともに、もののおおよその大きさが分かる感覚を身に付けるようにする。赤ちゃんが産まれてくる時の大きさを予想して感覚を養う。

長さってどう測るの？

赤ちゃんの重さは、ランドセルと同じくらいだと思う。

理科「ヒトのたんじょう」助産師・養護教諭の出前授業

助産師の話を聞く中で、ヒトは母親の体内でどのように育って誕生するのかを知ることができるようにする。

母親のお腹に聴診器を当てて赤ちゃんの心臓の音を聞くことで、命が宿ることの素晴らしさに気づき、自分自身も同じようにお腹で育ち生まれたことを実感させたい。

心臓の音聞こえるよ！

〇〇さんの心臓の音すごく大きいね。

保健「体の成長とわたし」

体の発育・発達には個人差があることや思春期になると体に変化が起きることに体験を通して気づき、異性との関わり方を考えるきっかけにする。

楽しみだ

お父さんお母さんと同じような体になるんだ。

僕と友達とは全然違うんだね。

図画工作科「等身大アートを作ろう」

絵の具を使って、いろいろな色を作ることができることを理解すると共に自分を表す色を考えて、好きな色について理由を話すようにする。

今の自分の大きさを見て驚いたり、喜んだりしながら成長を実感する。

友達の作品を見て相手の良さに気づくことができる。

私って大きいんだ。

赤と黄色が好きだから混ぜてみよう。

小さい時からずっと好きな色。

現在の学年終了時に目指す姿の例（自情学級3年男児）

赤ちゃんの成長の過程を正しく理解する。

友達や先生との関わり方を考えられる。

保護者や教職員と生きることの喜びを共感できる。

9. 成果と課題

【成果】

今回の実践を通して、得られた成果として３点挙げられる。

１点目は、赤ちゃんや第二次性徴・プライベートゾーンについて正しい知識を得られることが出来たことだ。命の授業の前に子どもたちにお腹の中の赤ちゃんの様子を絵に描かせ、重さを教室にあるもので例えて予想をさせた。すると、赤ちゃんの様子は、母親の臍と赤ちゃんの臍が直接繋がっている図や、頭を上に立っている赤ちゃんの図を描いた児童が大半であった。また、重さは、「筆箱ぐらい。」「指導用時計（約１Kg）」などと、児童が予想している。このことから赤ちゃんはとても軽く、小さい子どもであると考えていることが分かった。これらを踏まえ、助産師からの命の学習を受けた感想には、「おおよそ１０ヶ月で生まれることが分かった。」「赤ちゃんは思っているよりも重いことを知った。」「お母さんたちは、靴下を履くのにすごく大変な思いをしていたと気づくことが出来た。」と述べる児童がいた。赤ちゃんが生まれてくる大きさや母親のお腹の中の様子について実際に触ったり、体験をしたりすることで予想とのギャップを肌で感じ、正しい赤ちゃんへの理解をすることが出来たと考えられる。

また、養護教諭による性の授業を通して、自分たち自身がいずれ大人の体に向かっていくことで、見た目が変わり、命が繋がっていく準備をしていくことを知ることが出来ていた。特に、自閉症・情緒障害学級の４年児童の保護者が『性の絵本』の作家であることから、今回、絵本の読み聞かせをオンラインでしていただいた。養護教諭の話の後に絵本を読んでもらうことで、「性」への抵抗感を減らしながら、真剣に向き合うことが出来ていた。自閉症・情緒障害学級の３年男児は、以前まで女性の教員との距離が近い、人の前でおならをするなどの行為が見受けられたが、この授業の後、「プライベートゾーンやんな。」などと自ら適度な距離を取ろうとすることが増えてきた。筆者のお腹の赤ちゃんを触りたいというときも、「先生、今触っていい？」「嫌な気持ちになる？」などと、相手に承諾を得る姿も見られるようになった。さらに知的にも困難さを持つ肢体不自由学級の５年女児は、授業の翌日に養護教諭に「私、下に毛が生えている。お姉さん？」などと話している場面があり、大人の体に近づいていることを本人なりに理解しているようであった。

さらに、出産後、赤ちゃんと一緒に支援学級を訪れると、「赤ちゃん生まれたの？！」「おめでとう。」と自分から声をかけてくれる児童がいた。また、ワーキングメモリが低い児童は、筆者の顔や名前を覚えていない様子でいたが、「お腹が大きかった先生だよ。赤ちゃん産まれてきたの。」と伝えると、「赤ちゃん！！」「覚えている！」と助産師の出前授業の時のことを思い出し、話し出した。このことから、体験的な学びによって、記憶が呼び起こされていることが伺える。

２点目は、命との向き合い方に考える機会が増えたことだ。助産師による命の授業では、筆者のお腹にドップラー聴診器を当てて赤ちゃんの心臓の音を聞いた。音を聞いたとたん、「生きている！」「心臓の音早い！」などと驚いている様子であった。また、お腹の赤ちゃんの心臓の音を聞いた後に、自分自身の心臓に聴診器を当てて音を聞いた。すると、「赤ちゃんよりゆっくりや。」「あ、ちゃんと心臓の音が聞こえる。」と心臓の音に関心を持つ児童が大半であった。さらに、３年男児はお礼の手紙に「心臓の音はとても気持ちいい音だと思った。」と述べており自分の命に関心を持つきっかけになっていたと考えられる。この授業後に「命」の詩を読んだ。これは、生きたいが生き続けることが出来なかった小学生が書いた詩である。詩の本文に「「命なんかいらない。」と言って　命をむだにする人もいる」という文章が記載されている。この文章に対し３年男児は、「ぼくは、腹が立ってイライラした時、命なんていらない。って思ったことある。」と話をしてきた。そこで、前回の命の授業で心臓の音を聞いた時の感想を思い出させながら、「じゃあ、なんで今頑張って生きようって思うことができるの？」と聞き返すと、「心臓は一生懸命生きているから。」「ママは、ぼくのこと大事にしてくれているから。」と命への向き合い方を考えで、表現する姿が印象的であった。

また、出産後に赤ちゃんとあった際、３年男児は、「赤ちゃんかわいいね。」「何で遊んだら、喜んでくれるの？」「先生、赤ちゃんのこと大事にお世話しないとだめだよ！」などと、話をしてくれた。なんでそんない

っぱい教えてくれるの？と聞くと、「大事にしないといけないでしょ！」と『生きている命』に対して真っ直ぐに向き合おうとする姿も感じられた。

３点目は、赤ちゃんや自分自身の成長や体について興味を持つことが出来たことだ。命の授業後、保護者に「ぼくはいつ生まれたの？」「重かったの？」などと話を聞いた児童が９人中５名いたことが分かった。保護者からの話では、この授業をきっかけに生まれた時の話をする時間が増えたと肯定的な話を聞くことが出来た。一方で、６年女児は、新しい命を産むことの大変さや辛さに着目していた。命の授業を聞いて、「私は子どもはいらない。」「私が子どもを産んだら、その子は不幸になる。」などと悲観的な考えを話していた。６年女児の家庭的背景もこの感想の大きな要因であるが、今ある命は当たり前ではないことを考えている様子であった。「命」の詩を範読後、作者の宮越由貴奈さんの母親の手紙を続けて読んだ。母親からの手紙の最後には「ご・め・ん。」という言葉が綴られている。この手紙を受け、「〇〇さんが子どもを産んだら、その子は不幸になるのかな？」と尋ねると、時間をかけて悩み、ゆっくりと「親になって、子どもを大事にしようという気持ちは大切かも。」「不幸になるかならないかは今は分からない。」と、本人なりに背景と重ねながら、自分自身のこれからを考えようとしている様子であった。学習の最後には、「私、いろんな人を大事にできるようになりたい。」と呟いていたことから、自分自身の成長に希望や期待を抱くきっかけになったと考える。

これら３点を踏まえ、発達段階や学年によって理解度は異なるが、「命」や「成長」に関して、それぞれの向き合い方が出来た実践であったことが伺える。また、実際に体験しながら話を聞くことで、「一人一人違う。」「自分も友達も大切にする。」ことを意義について考えられたのではないだろうか。

ＥＳＤの視点から考えると、どの児童も赤ちゃんという新しい命を、喜び、幸せを共有するきっかけとなった。さらに、一人一人の人権を見つめ直すことで、「自分自身」という存在を改めて感じることができたのではないだろうか。その結果、「幸福感の重視」に繋がったことが今回の単元で得られた成果である。

【課題】

実践を終えて、課題としては３点挙がられる。

１点目は、対象児童が３年生以上であったことである。助産師による命の授業は、１年生でも理解がしやすい内容であったが、第二次性徴や「命」の詩に関しては、１年生にとっては難しい内容であった。そのため、今回、【ふかめる】に関しては、１年生には取り出しは行わず、３～６年生のみに行った。特別支援学級の特徴でもあるが、他学年がいる場合の授業計画として、対象を明確にすることが必要であると考える。

２点目は、学習のまとめについてである。特別支援学級で学年も発達段階も異なるため、難しすぎない学習のまとめとして、等身大アートの作品作り行った。等身大アートにすることで自分の成長を見つめるきっかけにしてほしいと考えた。自分らしい色を自分なりに彩ってみるように活動を促した。しかし、いざ作品づくりが進んでいくと、色塗りに過ぎない状況になってしまった。今回の学習の中で、一人一人と時間をかけて話をすることで自分の思いを伝えられる児童が、大半であることが分かった。産休までの間の限られた時間であったため、等身大アートに加え文章を作成することが難しかったが、一人一人の意図をしっかりと表現できる場面を作ることが必要であったと考える。

３点目は、学校全体への周知の仕方である。特別支援学級の掲示板はなかなか一目につかない場所にあることで、特定の児童にしか見てもらえない状況である。交流学級のある児童は「原爆の絵みたい。」ということを語っていたようである。この言葉を聞いたのは、特別支援学級の他の担任であった。その教員は「残念に思われるかもしれないが」と前置きをした上でこの話をした。この「原爆の絵みたい。」という言葉は、児童の率直な思いであり、その児童にとって印象的な出来事や「命」について本人なりの考えがあったに違いない。この言葉に対して、当該教員は思いを引き出し切ることができなかったようである。このことを踏まえると、教職員には、事前に学習内容や目的を丁寧に共通認識して他の児童に発信ができるようにしなければならないと考える。また、どの人間にも同じようにある「命」をどのように向き合っていくのかを、学校全体でも意識できるような組織づくりをしていく必要があるのではないだろうか。現場では、各学年・各学級での活動は見えているようで、見えづらい状況であることも事実である。このことを考えると、カリキュラムマネジメントを

して、学校全体として周知することで、学習の繋がりを作ることができるだろう。特に、特別支援学級の児童の学習内容は、積極的に関心を抱いてもらうことが求められるだろう。そのためにも、掲示板などを有効に活用し、全学年・全教職員に認知してもらえるような環境づくりをしていくことで、インクルーシブな教育に繋がっていくと考える。